

『パン屋、ジビエ料理に挑戦!!(4)』

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

牧

草を食んでいる小ジカは全く人を警戒する素振りがありません。

どうも今年生まれたばかりのようです。地元の言葉では今年生まれた子ジカの事を「コッコ」と呼んでいて今年入った新人の事などもコッコと呼ぶそうです。

愛くるしいコッコに向かい銃を構えます。

こんな可愛い動物を殺すなんてなんて自分はひどい人間なんだと反省と後悔をしながら引き金を引きます。ドコン!という爆音の後、倒れるはずの子ジカは走り去って行くのでした。

「今、可愛いかかわいそうとか考えていただろう」。猟師達はお見通しなものでした。「かわいそうなんて考えていたら当たる物も外れるぞ」。凶星を突かれると今度は近距離で外した自分が急に恥ずかしくなってきました。

「今なんて外したかよく考えろ! どうやったら獲れるか考えろ。そのうちにシカを撃つことに抵抗がなくなるから」と意味深な言葉をつぶやく猟師の脇で「なんて自分は都会っ子なんだろうか」とうつつむくしかできませんでした。

車にもどり、林道を上っていくと倒

木によって道がさえぎられています。「ああ引き返すのか」などと考えていると「木を切るぞ。鋸を持って」ときます。

都会の常識は自然の中では通用しない事を植え付けられた瞬間でありました。

倒木を切り前に進むと「この先には人が少なくとも1年間は入り込んでいない」「今度は確実に仕留めよう」という期待、不安でドキドキと鼓動が高鳴ってくるのがわかります。坂を上りきると車から降りての忍び猟に変わります。

尾根ごとに1人ずつ分かれて歩いて行きます。登山の様に山道を歩くのではなく膝丈ほどの草の中を1人で入って行きます。時には身の丈ほどの草の中にも入って行きます。

地図もなく初めて入った山を1人で歩いていると怖くて不安、という感情が何故か湧いてこない自分を発見してびっくりしてしまいます。これは銃を持つている事に起因する安心感と、シカ探して恐怖を感じる余裕がなかった事によるのでしょうか。

しばらく山を歩いていると目が慣れてきたせいかシカの通っているの道「シカ道」というものを見つけられるようになってきます。その道沿いに

シカが寝ていた後の草がつぶれているのでわかります。「この群れは7匹だな」などもわかるようになってくるのです。その頃にはシカ撃ちが「かわいそう」から「魚を釣る為に工夫する」となったら変わらない感情になっていることに気づいてきます。

見えるようになるのとタヌキの糞が集まっている糞場やヒグマの糞、足跡などが浮かび上がってくるようになります。

分かれ道に差し掛かると足跡の多いほうに向かって行くので気づいた頃には尾根を2、3個も外れた所をフラフラして

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社プランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー 1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

